在外研究レポート

オハイオ州立大学　在外研究レポート

千葉商科大学商経学部准教授
外川　拓
TOGAWA　Taku

プロフィール

2013年、早稲田大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得。早稲田大学商学学術院助手、千葉商科大学商経学部専任講師を経て、2016年に現職。専門は、マーケティング、消費者行動論。最近の主な業績として、『感覚マーケティング』（共訳、有斐閣、2016年）など。

1．はじめに

2016年8月21日から11月20日の3か月間、短期在外研究の機会を頂き、米オハイオ州立大学心理学部、Fujita Kentaro研究室で客員研究員として研究活動を行ってまいりました。まずは、私の在外研究に際し、学内外の先生方に多くのご理解やご協力を頂いたことに対し、この場をお借りして御礼申し上げます。

振り返ってみると、いまだ研究が発展途上の私にとって、今回の在外研究は非常に良い経験になりました。米国トップクラスの先生方と研究生活をともにする中で、最近の研究動向や方法論などを学ぶことにより、自分自身の研究をどのように進めていくべきか、どのようなところが課題となるかについて明確にすることができたと思います。

学術的な成果については、本学の紀要などで報告を行うこととし、本稿ではより現実的で具体的な事柄に主眼を置きながら、在外研究の報告をさせて頂きます。どのような大学で在外研究を行ったのか、事前の準備はどのように進めたか、現地での研究活動や生活はどのようなものであったか、といった内容です。今後、在外研究をお考えの先生、あるいはそもそも在外研究というものに馴染みがない（私と同じ？）若手の先生方にとって、本稿の内容が少しでも手助けになれば幸いに思います。

2．オハイオ州立大学とは

2－1　基本情報

オハイオ州立大学（以下、OSU）は、米国オハイオ州コロンバス市のダウンタウンから4kmほど北に位置しており、およそ5万人の学生数を擁する総合大学です。OSUの歴史は古く、1870年に現在のOSUの前身となるオハイオ農工大学が創立され、1878年に現在の名称へと変更されたあとも、多くの卒業生を学界、政界、実業界に送り出してきました。

OSUを訪れると、まず圧倒されるのはそのスケール感です。7つのキャンパスがあるなかで、私が訪れたコロンバスのメインキャンパスには、オーバルと呼ばれる広大な庭園、フットボールの試合後に学生が飛び込むというミラーレイク、メインの図書館であるトンプソン・ライブラリなどが広大なキャンパスのなかに点在しています。

規模だけでなく、研究面での実績にも目を見張るものがあります。卒業生や教員にはノーベル賞受賞者も複数いるほか、2013年の『TIMES』誌による世界大学ランキングでは59位、2015年の全米州立大学ランキングでは16位に入っており、とりわけ農学分野や航空工学分野は高く評価されているようです。

私の専門分野であるマーケティングや消費者行動論においても、著名な教授陣が名を連ねています。例えば、消費者行動論における定番テキストの著者として知られるR. ブラックウェルは、かつてOSUの教授と

して教壇に立っていました。現在も、私が所属していた心理学部にはR. ペティ（社会心理学において、態度形成や説得プロセスに関する理論である「精緻化見込みモデル」をカシオッポとともに構築した人物。消費者行動論においても非常に著名）が教鞭をとっています。

２－２　OSUとスポーツ

OSUはスポーツの面でも大きく注目されており、特に、フットボールはOSUスポーツの代名詞です。フットボール・チームをはじめ、OSUのスポーツ・チームは「バッカイズ」（Buck eyes: トチノキの実の意味。オハイオ州はトチノキの実に似た形をしており、別名Buck eyes stateと呼ばれることに由来）と呼ばれています。

コロンバスのメインキャンパスに隣接した場所に、バッカイ・スタジアムと呼ばれるフットボール競技場があります。これはOSUが所有している施設の１つで、なんと収容人数約10万人という大規模スタジアムです。フットボールの試合においては、特にミシガン大学が宿敵といわれており、日本の早慶戦のように、対ミシガン大学の試合当日はOSU周辺が非常に活気づきます。「活気づく」というときれいな表現ですが、実際には、朝からアルコールを飲み、夕方からの試合を大盛り上がりのなか観戦するといった熱心な（？）ファンで町中があふれかえります。また、ミシガン大学は頭文字の「M」をシンボルマークとしているため、試合当日は、OSUキャンパス内の看板や標識の「M」の文字をすべて×印で覆うなどといったユニークな伝統もあります。

３．在外研究の準備

３－１　受け入れ先の決定

このように、OSUの特徴や魅力を紹介しておりますが、正直に申し上げると、当初在外研究の行先として考えていたのはOSUだけではありませんでした。もともと私には関心のある研究テーマが複数あり、どれに軸足を置くかにより、行先が異なったためです。

そこで、最初に消費者行動研究におけるトップ・ジャーナル、*Journal of Consumer Research*の編集委員リストのなかから、自分自身の関心と近そうな先生に、直接受け入れ願いのメールを送ることにしました。印象を損ねないようネイティヴ・チェックを複数回通した文面に（相手の先生の専門により、内容も変えました）、詳細なCV（履歴書兼研究業績リスト）や最近の研究成果の要約を添付し、10数名の先生にメールをお送りしました。

さすがにここまで丁寧に準備したメールを複数名に送れば、１人くらいからは受け入れ承諾の返信が届くだろう思っていましたが、すぐにこの見込みが甘いものであることに気づかされました。ふたを開けてみると、お断りの返信を下さった１名を除き、ほぼすべての先生が「返信なし」だったのです。日ごろ就職活動に励む学生に「何社から断られようと、いちいち気にするな」と言っている私ですが、これにはさすがに意気消沈しました。その後に聞いたとある先生からのお話によると、トップ・ジャーナルの編集委員になるような著名な先生のもとには、何名もの受け入れ希望者が続々とコンタクトをとってくるため、面識のある人にしか返信しない（現実的にできない）そうです。

こうした情報を踏まえ、OSUのFujita Kentaro先生に受け入れ希望のメールを送ることに決めました。Fujita先生ももちろん著名な先生ではありますが、かつて早稲田大学消費者行動研究所が主催したシンポジウムで一度お会いし、接点があったためです。Fujita先生は、現在、社会心理学や消費者行動研究で注目されている解釈レベル理論の構築に貢献した社会心理学者であり、*Journal of Personality and Social Psychology*や*Journal of Consumer Research*などのトップ・ジャーナルに数多くの業績を残しておられます。結果的に、Fujita先生から承諾を頂き、何とか、在外研究の受け入れ先を確保することが出来ました。在外研究の１年前のことです。

もし、どこも受け入れ先が見つからなかったらと考えると、今でもぞっとします。米国への在外研究においては、ツテやコネといったものが重要であるということを、身をもって痛感しました。

３－２　ビザの取得

米国への在外研究を行う際、最も一般的なのはJ-１ビザですが、これを取得するためにはまずDS-2019という書類を入手しなければなりません。受け入れ先の大学の国際センターや人事課などにあたる部署に直接連絡し、発行を依頼します。これには予想以上の時

間がかかりました。私は比較的スムースなほうでしたが、それでも２月に発行を依頼し、UPS の小包で手元に DS-2019 が届いたのは６月でした。

早速、DS-2019 に加えて web 上で I-901 の支払い証書などを持参し、米国大使館へビザ申請の予約を行いました。予約日当日、朝一で赤坂の大使館に赴き、大使館員との面接に臨みました。無論、面接は英語のため非常に緊張しましたが、15 秒ほどで終わり拍子抜けしたのを覚えています。やり取りは、「J- １ビザ希望ですか―はい」「行先はオハイオ州立大学ですか―はい」「専門は何ですか―マーケティングです」の３点のみです。面接から１週間後、無事、ビザが郵送で届きました。渡米１か月前のことです。

３－３　住居の決定

米国生活の準備でもっとも不安だったのが住居選びです。大学のゲストハウスはすでに空きがなかったため、アパートを探すこととなりました。Fujita 先生に相談したところ、Airbnb（エアー･ビー･アンド･ビー）というサイトをお勧めいただきました。こちらが借りたい期間、エリア、予算などの項目を入力すると、条件に適合した物件が表示され、その場で大家と取引できるサイトです。当初、実際に自分の目で物件を見ずに賃貸契約を行うなんて・・・と抵抗がありましたが、Airbnb には厳格なポリシーが設けられているうえ、大家に対するクチコミ評価が公開されていたため、不安となる要素は特にありませんでした。

色々と探した結果、OSU のキャンパスから２km ほどのところに位置するアパートを借りることにしました。Google ストリートビューで見る限り、周囲の治安も良さそうだった点、近くに公園やスーパーがあった点などが決め手でした。家賃は 20 数万円ほどでやや高額でしたが、家具、食器、リネン類はすべてセット済みであるうえ、電気代、水道代、インターネット代も込みであるため、トータルで考えると決して割高ではなかったと思います。

とある米国出身の方からのお話によると、Google ストリートビューで治安を判断する際、もっとも分かりやすい手がかりは、「路駐してある車」だそうです。路肩に止められた車が、新しくて整備が行き届いた車なのか、数十年前の型式でヘコみや傷がそのままの車なのかで一目瞭然というわけです。こうしたアドバイスも非常に参考になりました。

４．コロンバス生活

４－１　いざ渡米

コロンバス国際空港までは日本から直行便がないため、ヒューストンで乗り継ぎを行うことになりましたが、事件は早速ここで起きました。乗り継ぎ前の飛行機が１時間近く遅れたうえに、入国審査には長蛇の列。乗り継ぎ便までの搭乗時間が刻一刻と迫ってきます。入国審査場の職員に「乗り継ぎ便があるので順番を優先してくれないか」と聞くも、「無理です」の一点張り。入国審査のレーンは空いているのにほとんど列が進まないため、様子をうかがってみると、隣接するレーンの係員どうしが客をそっちのけで楽しく談笑中。海外ではよく見かける光景ですが、状況が状況だけに私は激怒し、「時間がないんだ、早くしろ！」と迫ったところ、「Rela ～ x ♪」と笑顔で返され、全身の血がさらに頭に上りそうだったのを覚えています。

結局、予定していた乗り継ぎ便には間に合わず、３時間後の別のフライトを手配しました。今考えると、航空会社の係員に相談するか、列に割り込み可能かについて先頭の客と直接交渉するのが正解だったと思います。

４－２　住居と交通手段

コロンバスに到着後、諸手続きが終わるまでの５日間はホテルに滞在したのち、前述のアパートへ引っ越しました。到着後、まず行ったのは携帯電話の契約です。日本で使用しているスマホが SIM フリー非対応だったため、現地でもっとも安い機種を購入しました。実際、通話に使用することはほとんどありませんでしたが、ちょっとした申請手続きなどのときに電話番号欄への記入が必須のため、真っ先に契約してよかったと思います。

コロンバスの市街地はバス路線網が充実しているものの、近距離の移動は自転車が非常に便利でした。到着後、１か月ほどは大学が提供するレンタサイクルを利用し、その後、マイ自転車を購入しました。現地で新車の自転車を購入すると最低でも 200 ドル近くするため、クレイグス・リストというサイト（日本の Yahoo! オークションのようなサイト）で出品されている中古自転車を購入することにしました。粗大ごみ寸前のものだったようで、なんと 25 ドル。状態は

ひどいものでしたが、近所の自転車ショップに持って行ったところ、10ドルほどできれいに整備してくれました。

私にとって、自転車というのは非常に良い選択であったと思います。自転車を使えば、大学までは12～3分、近所のスーパーまでは5分程度で行けるため、日常の移動はほぼ事足ります。滞在中、自動車が必要な場面はほとんどなく、どうしても遠出する場合のみバスに乗るか、Uber（タクシーを呼べるスマホのアプリ）を利用するかで十分でした。ただし、もし1年間滞在したり、郊外に住んだりしていた場合は、自動車が必要になっていたかもしれません。

4－3　日本からの持ち物

日本からは、着替え、洗面用具のほか、ノートPC、研究に必要な最低限の書籍数冊、手土産などを持っていきました。在外研究後に振り返ってみて、必要だったもの、不要だったものをまとめると以下の通りです。

■持ってきてよかったもの

スリッパ。アパートのなかで靴を履く生活にはどうしてもなじめなかったため、スリッパが非常に役立ちました。また、意外にもスリッパは大型スーパーでも売っていなかったので、持参してよかったと感じます。

■持ってくればよかったもの

和食器。箸は大きめのスーパーで売っていましたが、茶碗、汁椀はどうしても手に入らず、結局、amazonで購入することになりました。

■持ってこなければよかったもの

スーツ。万一、フォーマルな場に参加したときに必要だろうと思い、また、サイズ等の関係で現地調達も難しいだろうと思い、念のためスーツを一着持参したものの、一度も着ることはありませんでした。Fujita先生曰く、「ビジネススクールであれば必要かもしれないが、心理学部ではいらない」とのことです。

4－3　OSUでの手続き

OSUでは、在外研究者への対応が充実しており、「J-1客員研究員オリエンテーション」が定期的に開催されています。私も現地到着後すぐに参加し、事務的な手続きについて説明を受けました。私はOSUから給与を支給される予定がありませんでしたので、ソーシャル・セキュリティ・ナンバーは申請しませんでした。また、米国ではJ-1ビザ保有者に対しても生命保険への加入が義務付けられているため、OSUが推奨するJ-1客員研究員用の保険プログラム（360ドル）に加入しました。

そのほか、OSUのwebメールの申請やIDカードの発行など、諸々の手続きが終わり、ようやく落ち着いて研究ができるようになったのは、到着してから10日後のことです。

5．研究生活

5－1　研究環境

私には、心理学研究棟（写真1）にある院生用研究室の1ブース（写真2）を割り当てて頂きました。デスクトップPCや共用プリンターがあり、PCにはMS Officeはもちろんのこと、SPSSなどの統計ソフトも入っており、日ごろの研究活動はもっぱらこの研究室で行っていました。基本的に、常に他の院生やポスドクも同じ部屋にいるため、研究に集中しつつ、ときに研究の議論を行ったり、分からないことを質問しあったりすることができ、とても良い環境でした。また、院生用研究室の壁には、Fujita先生の研究業績のコピーがズラリと貼り付けられ、院生たちがいかにFujita先生を尊敬しているのかをうかがい知ることができました。

心理学研究棟には研究室のほか、データ収集室がいくつも設けられていました。データ収集室には、パソコンが多数並べられており、大学院生は実験を行う際、参加者をそこに集め、パソコンで質問に回答してもらうことができます。実際に、実験参加者となる大勢の学部生が、朝から晩までデータ収集室の前で順番待ちをしている光景が印象的でした。

実験参加者は基本的に学部生であり、コースクレジット（授業の加点）をインセンティブにして集められています。参加する日時を管理するための予約サイトが設けられているため、学部生たちは自身の都合が良い日時に気軽に実験に参加することが出来ます。私の専門である消費者行動研究においても実験的手法は多用されるため、実験を行いたいと思ったらすぐに実行できる設備や環境が整っているのは非常に羨ましく

思いました。

写真１　心理学部の研究室棟である Lazenby Hall

写真２　大学院生用研究室。パソコン１台が割り当てられた

５－２　研究会

毎週月曜、Fujita ゼミが行われ、私ももちろん毎回参加しました。ゼミには、大学院生やポスドクなど10 名ほどが参加しており（写真３）、90 分を１名の研究発表に割り当てるため、じっくり深く議論することができます。米国では、大学への就職の際、ジョブトークと呼ばれる場で、自身の研究紹介を行う必要があります。ゼミのなかでは、このジョブトークの予行演習を行う人が多くみられたほか、今後の研究案をプレゼンする人などもみられました。Ｍ１の院生から Fujita 先生まで、対等かつ自由に議論しあう雰囲気がとても印象に残っています。

もう１つ印象的だったのは、GAP（Groups for Attitude and Persuasion）研究会です。GAP 研究会とは、1980 年ころから心理学部内で開催され続けている伝統ある研究会で、前述の R. ペティをはじめとした心理学の大御所の先生のほか、ビジネススクールの客員研究員なども加わり、毎回、若手研究者が自身の研究内容を発表していきます。ここで紹介された内容が、数年後にトップ・ジャーナルに掲載されることも珍しくないため、一級品の研究がどのように進められており、最新の研究動向がどのようなものかを把握するうえで、非常に貴重な場でした。

私も GAP 研究会で一度発表する機会を頂き、参加者の方から多くのコメントをいただきました。参加者は、一流ジャーナルの査読者を行っていることも多いため、自分自身の研究をジャーナルに投稿した場合、査読においてどのような点が指摘されるかを事前に知ることもでき、その意味においても非常に価値ある経験となりました。

写真３　Fujita ゼミのメンバー

６．むすび

研究の取り組み方や今後の方向性を考えるうえで、今回の在外研究はかけがえのない経験となりました。このような機会を得ることができたのも、学部長をはじめとした執行部の先生方、国際センターなどの関係各所、ならびに授業負担等の点で私が不在の間にご協力いただいた諸先生方や学部事務課の皆様のご協力によるものであると改めて感じております。すべての方のお名前を挙げることはできませんが、この場を借りて重ねて御礼申し上げる次第です。今後、米国への在外研究を予定されている先生にとって、本稿の情報が少しでもお役に立つものであれば幸いです。